

参加と協力

総会号

〒790-0011 愛媛県松山市千舟町5-7-2-2F
☎(089)947-6995

令和5年7月4日

会長挨拶

愛媛県青年海外協力隊を育てる会
会長 土居 英雄

猛威を振るっていた新型コロナウイルスも2023年5月8日をもって感染症法上の5類とされました。JICAによりますと、コロナが海外協力隊に与えた影響は著しく、20年3月以降、派遣中の全隊員が一時帰国を余儀なくされました。しかし、同年11月には、条件の整った国から隊員の再派遣を開始し、23年1月末現在、64カ国に822人のJICA海外協力隊を派遣しており、活動は活発化しています。

愛媛県出身の協力隊員も22年4月時点では6人（6カ国）が派遣されていましたが、23年4月現在は11人（9カ国）に増えています。私自身も22年から協力隊員による県庁表敬訪問に3回同行し、愛媛マンダリンパイレーツ様など提供の野球用具を中米グアテマラの協力隊員（松山市出身）へ送る贈呈式に出席しています。

22年8月には、協力隊を経験した教員の皆様と県教育委員会の田所竜二教育長様との意見交換会を開きました。県青年海外協力隊を育てる会が、県内の対象者から事前に行ったアンケートのうち、「協力隊の経験は生徒に良い影響を与えていると思いますか？」の質問に対して、41人中36人もの教員が「はい」と答え、具体例として「海外生活での経験は生徒が興味を待って聞いてくれる」「異文化体験を通して、広い視野をもって考えられるようになった。生徒を

多面的に理解しようと思えるようになった」などを挙げていました。会場では、地理の授業や海外の学校とのオンライン交流で、外国語指導助手(ALT)と連携した具体例を紹介するなど、協力隊の経験を児童生徒の成長につなげたいとする情熱がひしひしと伝わってきました。

一方、アンケートでは「良い影響を与えていると思いますか？」の質問に、5人が「どちらとも言えない」と回答しており、「残念ながら、協力隊の経験を伝え、国際理解や国際協力について話をするチャンスがほとんどない」といった悩みも書かれていました。田所教育長様は「一人では無理でも、共鳴する同僚がいればできることが増える。自分のやりたいことを心に蓄積し、目標達成へステップを踏むことが大事」と強調されていました。心強い助言だったと思います。

また、昨年6月に愛媛県と愛媛大学、JICA、育てる会（事務局）が締結した「愛媛グローバル人材育成プラットフォーム」は、ホームページも立ち上がり、活動を本格化させようとしています。今年も、育てる会は愛媛県の将来を担う人材の育成に取り組みたいと思っていますので、ご協力ご支援のほどよろしくお願いいたします。

私たちはふるさとに帰り、 愛媛を元気にします！

『カメルーン活動記録』

新家 広 幸 (松山市出身)
(2021年7次隊・カメルーン・青少年活動)

皆さんこんにちは。初めまして。私は、2021年10月からカメルーンの幼稚園で活動している新家広幸です。早いものでカメルーンに来てもう1年6ヵ月が経ちました。1年以上過ごしていますが、断水や停電などで生活が制限されるのはいまだに慣れないように思います。

コロナ禍での派遣で、現地到着後に自主隔離期間が2週間あり、それにより現地語学学校へ通う期間もやや短くなっており、かなり焦っていたのも懐かしく感じます。また、カメルーンではコロナ禍でもマスクをしていない人々が多くかなり面食していました。

私はンヴィラ県エボロワ市初等教育事務所所属し活動を行っています。今でこそ幼稚園で活動していますが、私の配属先は厳格で、語学レベルが事務所の基準を超えなければ現場には派遣しないという方針が出来上がっており、半年以上活動ができませんでした。それでも、自分のできることを探してモチベーションを維持してきました。現場へ派遣後は主に先生への授業提案、教材作成、衛生概念の普及活動を中心に行っています。各幼稚園によって、園の規模、道具の有無、水道やトイレの有無、先生の教育への熱意、グラウンドの大きさなどのすべてが違うので、各幼稚園に合わせた授業提案などを行う必要があるので苦労します。

衛生概念の普及で手洗いの啓発をしており、各幼稚園に蛇口付きのバケツと石鹸を提供し、また手洗いの方法を紙芝居にして教えています。私が体育の授業の後には必ず手を洗うように呼び掛けていると、今では先生たちがそれらを子どもたちに呼びかけてくれるようになってきています。

授業提案では、例えば、毎週金曜日にある体育の授業を先生に提案して、提案した内容で先生たちに授業をしてもらっています。うまくフランス語が話せないのも、事前に紙ベースで授

業案を作成し、先生たちと共有するようにしたことで、活動がスムーズに進むようになりました。また、必要な体育道具を先生たちと共同で作成したり、共同出資したりして揃えることで授業のレパートリーが増え、先生方も喜んでいました。

教材の作成も注力している活動のひとつです。特に、算数教材の作成を先生方と様々な議論を重ねて作成しました。実際に先生方に使用してもらいと、自分とは違う方法で使用したりするので新たな発見につながります。さらに自分ならこういう使用方法で授業を行う、ということ提案することで、先生方も「それはいいね。」と受け入れてくれることもあり、カメルーン式と日本式をミックスした新たな指導法が誕生しつつあります。

休日は散歩や買い物やサッカーをすることが多いです。エボロワ市はとても広いので買い物に行くだけでも1時間以上歩くのが普通です。マルシェではよく買い物をするお店の店主さんが親切でおまけをしてくれることがあったりなど、私のことを気にかけてくれるので、こちらとても過ごしやすく感謝しています。

エボロワ市を知り尽くそうと、知らない道を散歩してそこで暮らしている方たちと会話したりするのも楽しみのひとつです。時には心無い言葉をかけられることもありますが、ここにボランティア活動できたことを伝えると凄く感謝されたこともあり、いろんな人と知り合うことがこんなにも楽しいことなのだと思感できました。

活動が終わった後や、休日の夕方に地域で行われているサッカーの試合によく参加しています。日替わりでいろんな場所に顔を出すので、たくさんの知り合いが増え、街で声をかけられることも増えましたし、中国人ではなく日本人がいるという認知が広まったと思います。

もう活動は終盤に差し掛かっていますが、今まで活動してきたことをしっかりと任地の先生方や事務所の職員の方と共有し、今後も任地の人々の手で活動が継続できるようにしていきたいと考えています。



サッカー教室



体育 (玉入れ)



手洗いの指導中

『ベトナムからの便り』

福田 楓（東温市出身）
（2021年3次隊・ヴェトナム・コミュニティ開発）

シンチャオ～！（こんにちは！）2022年1月から（2年間の任期）ベトナム北部の山岳地域イエンバイ省ギアローでコミュニティ開発の職種で観光開発の活動をしている福田楓です。

ベトナムの国土は縦に非常に長く、地域によって気候が大きく異なります。私の暮らしている地域は四季があり、夏は40度、冬は5度以下になる日もしばしばあります。ギアローに赴任したのが春先で、ちょうど桜のシーズンでした。日本の桜とは少し異なりますが、私の到着を待っていてくれたかのように咲いており、嬉しかったのを覚えています。

到着翌日に職場へ挨拶に行くと、職場の偉い方がベトナム語の名前を私に付けてくれました。私のベトナム語の名前は「đồ thu ban」（ドォトゥバーン）です。意味は「đồ（人民委員会の偉い人と同じ苗字）thu（秋）ban（ベトナムの桜）」です。普段は「ban（バーン）」と呼ばれています。

私はギアロー人民委員会の文化情報室（日本の市役所の観光、スポーツの部署）に所属しています。しかし私が赴任した頃はまだコロナ禍だったこともあり、同僚は自宅療養・待機で誰一人としていませんでした…。そのような中でも寂しい思いをしなかったのは親切な大家さん家族の存在です。「これからは私をお母さんと呼んでね！」から大家さん家族との同居生活がスタートしました。ベトナムに来た当初はベトナム料理に慣れることができなかつたのですが、大家さんの作る健康的で美味しいご飯のおかげで慣れることができ、美味しい美味しいと調子に乗って食べていると体重が一気に増加し、未だに減らせていません。私生活では、息子さんの結婚式や旧正月テトなどの行事には家族の一員として参加をさせてもらい貴重な経験ができ、嬉しかったです。

イエンバイ省ギアローは高床式住居で生活する少数民族タイ族が人口の半数以上を占めています。ギアローでは毎年9月にユネスコ無形文

化遺産にも登録された少数民族の大きな祭り（タイ族の方2,000人ほどが一堂に会し踊る xoè thài ソエタイ）があります。またギアローから3時間ほど行くとムーカンチャイという棚田が非常に美しい地域があります。

私の活動内容は観光開発です。特に上司が私に期待していることは「イエンバイ省ギアローを一人でも多くの日本人に知ってもらい、実際に訪れてほしい」ということです。そのため私はまず形になるものを作りたいと思い、ベトナムで初めてのツアー作成をすることにしました。私は協力隊でベトナムへ来る前は、旅行会社で学校営業、旅程作成、修学旅行の添乗員をしていました。前職と繋がりのあるベトナムの旅行会社へ連絡を取り、挨拶に伺い、旅行会社の方、ガイドさんがイエンバイ省へ遙々視察に来てくださり、打ち合わせを繰り返しました。日本人が団体で訪れたことのない田舎の地、ベトナムでのツアーの作成は思った以上に大変でしたが、到着した参加者の姿を見て涙が出るほど嬉しかったのを覚えています。旅行会社とイエンバイの各施設を繋ぐことができ、活動をする中で念頭に置いていた「自分が帰国した後も継続できるように…」というものが一つ達成できました。今年も9月にツアーを実施予定なので皆様のご参加お待ちしております！

旅行が趣味の私は、この1年でベトナムの様々な地域を訪れました。その中で感じたことは観光地化されすぎるのも良くないということです。オーバーツーリズムが発生している地域が多くあるように感じました。ベトナム人と日本人の旅行目的の違いはありますが、その地域で暮らす住民の暮らしや自然を大切にしたい観光開発が大切であると考えます。しかし観光客を受け入れる体制がまだ十分とは言えないギアローは改善点も多くあるため、残りの任期で少しでも観光客が訪れやすい体制作りを現地の方としていけたらと考えています。

そして愛媛県のニュースで県がベトナムと密に関わっている様子をよく目にし嬉しく思っています。何か一緒にできることがあれば嬉しいです！シンカムオン！（ありがとうございました。）



旧正月の大家族集合



タイ族の祭り



水牛の大群

『今日も私はタイが好き』

小田 悠奈 (福岡県出身)
(2022年1次隊・タイ・障害児者支援)

小学生の頃から、海外で生活したり旅をしたりするテレビ番組が大好きでした。「いつか海外に行ってみたい、生活してみたい。」と憧れ、JICA 青年海外協力隊という存在を知ったのは高校生の時でした。あの頃の思いから早16年、34歳にしてやっと協力隊の試験を受け、現在、タイのコンケン県にある「コンケン第9特別支援教育センター」でボランティア活動をしています。初めての海外、初めてのタイ、初めてのだらけの生活が始まりました。

ここでの生活が始まって、強く感じたのは、自分が「少数派」の立場にいるということです。言葉の壁は思っていたより分厚く、大きいものでした。

任地の職場の上司・同僚をはじめ、通所している子どもたち・保護者たちはとても温かく接してくれました。毎日接しているのは、知的障害のある3～5歳くらいのクラスの子どもたちです。言葉を話せる子どもは11人中1人と少数です。子どもたちとは毎日、音楽の授業、イラストや文字のマッチングの個別課題、空き時間には一緒に遊んだりする日々を過ごしています。

配属先で私が積極的に行っていることは、子どもたちの興味関心を探ることです。子どもたちと仲良くなることから、また、保護者にも子どもたちの好きなものを聞き、コミュニケーションをとるところから始めました。

個別課題の時には、子どもの集中力が続くように課題に応じて終わる時間を短くしたり、見通しが持てるように次の活動にその子の好きな動物の教材の課題をすることを伝えたりしました。人との関わりが好きな子とは、一緒に歌を歌って楽しい時間を共有しました。私にできることは、子どもたちと仲良くなること、楽しい時間を過ごすことだと思ったので、とにかく子どもたちへ積極的に関わりにいきました。

笑顔でいる時間を重ねることで、子どもたちの方から私のところへ近寄ってくれることが増えて来ました。私を必要としてくれる瞬間が少

しでもあることで、ここで役に立てていると感じることができました。

大人たちもちろん、たくさん話しかけてくれたり、気にかけてくれたりしています。でもどこか距離を置いてしまっているのは、言葉がわからないところと自分の臆病さからだと思います。ここへきて8ヶ月が経ちました。まだまだ私自身の壁は自分で破れずにいますが、自分のペースで大好きな任地の人たちに恩返しできるようにしていきたいと思います。

私はタイの人たちの自己肯定感の高さにも感銘を受けています。携帯やiPadのホーム画面は自分のベストショットだったり、一緒にカフェに行ったらしばらく注文したカフェと自分自身の写真撮影をキメ顔でしたりしています。そんなタイの人たちの習慣や考え方は素敵で、そんな姿が大好きです。

私が愛媛へ帰って子どもたちへ伝えたいことは、「隣の人へ思いやりを持って接すること」です。タイに来て、人と違うことを受け入れて、ただその人へ思いやりを持って接することの大切さを学びました。また、人と考え方が違うこともあります。違っていてもその人のいいところを見つけること、違いを楽しみ、違うことで自分の知見が広がることの素晴らしさを知ることができました。こんな当たり前のことですが、日本にいた時に自分ができていたかと言えば全くできていなかったと反省しています。勝手な思い込みや先入観で人を判断していたのではないか、自分の考えを正当化して、それを人に押し付けていたのではないかと考えることがあります。考え方、価値観も100人いたら100通りのものがあります。でも、誰かと一緒であることに安心感や価値をおいていた気がします。人と違うから自分の意見を言えず、自己表現ができないでいました。そうではなく、自由に表現すること、自信を持つこと、主張をしてもいいことを改めて感じました。自分で勝手に制限していたようです。

帰国したらいろんな多様性を楽しみ、受け入れ、自信をもって生きていける日本の愛媛の子どもたちを育てていきたいと思います。



同僚と共に、地域の文化イベントに参加



授業の様子



配属先の子供と一緒に

『協力隊あるある マラウイ編』

今井元子（松山市出身）

（2013年2次隊・マラウイ共和国・行政サービス）

私は、平成25年から27年の2年間、エイズ予防啓発のグループ派遣の一員として、マラウイ共和国のムジンバ県社会福祉事務所を拠点に活動を行いました。活動内容としては、近隣（といっても一番近いところで40キロ先）の村に派遣されていた先輩隊員やヘルスセンター勤務の同期隊員とともに、CBO（住民を主体とした活動組織）を拠点にエイズ予防啓発を進めるというものでした。

学生時代、海外ボランティアについては関心があったものの、特に語学が得意でもなかった私は、そのまま地元の市役所に事務職として就職しました。その後、38歳になった頃、たまたま見かけた募集要項から「青年海外協力隊に応募しよう」と思い立ち、家族に内緒で応募。1回目で、運よく合格し、現職参加で派遣されることになりました。

当時、マラウイ共和国では青年の約10%がHIV ウィルスに感染していると言われており、それが原因で十分に働けず貧困に陥ったり、両親を失い孤児になるケースが増加、感染者への差別も社会問題化していました。事前研修でそのようなことを学び、満を持して現地に向かったわけですが、青年海外協力隊はそんなに甘くないのは、皆さんもご存知かと思います。

協力隊あるある①：

ボランティアが来ることを知らない

まず最初の衝撃は、配属先の上司に「うちにJICA ボランティア来ることになってた？」と

言われたことでした。ボランティアを要請した上司はすでに異動になっていて、引き継ぎが行われないまま、私が来てしまったのでした。「さて、何をさせる？」ということになり、とりあえず毎日社会福祉事務所に出勤し、皆さんの仕事を観察することから始まりました。

協力隊あるある②：

ボランティアと一緒に活動する予算がない

国家予算の約40%を海外からの援助で賄っているマラウイ。各国の事情に常に翻弄され、公務員の給与さえ遅れる状態でした。この時期すでに、CBOの活動は停滞しており、またガソリン代もないという状態でした。

さて毎日、社会福祉事務所にはさまざまな相談の方が来ます。「土地に関する近所との争い」についてのおばあさんや、「国内移動中にお金を盗まれ家に帰れなくなった若者」、「隣国ザンビアに嫁いでいたが、夫のDVから逃げてきたマラウイ人妻と子供」が警察に移送されてやって来たこともありました。またある日は「孤児院を無事退所する大学生」が来たり、これも仕事？と思うこともしばしばでした。

そんなある日、エイズ孤児奨学金の申請・報告に来た学校長と教師に、いつもは穏やかなスタッフが激怒している様子を目の当たりにしました。あとで理由を聞くと「すでにエイズで亡くなった自分の妹の名前が申請書に書いてあり、その奨学金を学校長が申請に来た。」とのこと。つまり不正が判明したというものでした。そんなことをするのかと驚いたのと同時に、エイズという病気がとても身近であることを実感した出来事でした。

協力隊あるある③：

活動はうまくいかないことが多い

さて、こんな日が3か月ほど続き、エイズ予防啓発活動ができない私は、配属先とは別の活動をする決断をしました。カウンターパートとも相談しましたが「ここは社会福祉事務所だからね、学校で活動したいとなると教育委員会だからねえ」とあまり賛同が得られませんでした。「縦割り行政がここにも!？」と思いましたが、小学校での教育が大事だと感じていた私は、「エイズ予防啓発をやらせてほしい」と近隣の小学校に直談判に行くことにしました。そのうち理解を示してくれる先生も現れ、少しですが前進した日々がありました。

協力隊あるある④：

時間は守られない

しかし、せっかく約束した日に行っても教師がいなかったり、そもそも学校が休みになっていたり。アフリカらしい洗礼も受けました。ちなみに、社会福祉事務所も毎日開く時間はまち

まちで、会議はだいたい2時間遅れで始まるのが当たり前で、最後には慣れっこになっていました。

協力隊あるある⑤：

JICA ボランティアの絆は強し

さて、任地ムジンバには、日本の NGO の現地事務所があり、たまの休みには JICA ボランティア以外の日本人も集まる機会があり「うまくいかない活動」について、互いに愚痴を話したりしました。そんな環境はありがたかったです。残念ながら活動の成果といえる華々しいものはありませんが、このときに出会った人々と今でも交流の輪が広がっているのは一生の財産と言えると思います。

現在の私の担当業務は、保育所等の指導監査で、適切に運営されているかを確認する業務です。現地の幼児教育は、まだまだ普及していない現状がありますが、業務を通じた経験や知識が、いつかアフリカで生かせればいいなと考えている今日この頃です。



アフリカの髪型に挑戦



小学校での活動



社会福祉事務所の同僚達



水汲みに挑戦

「地球の料理教室」 ～ナイジェリア料理「ジョロフライス」～

大石 紗己（東温市出身）

（平成25年3次隊・セネガル・日本語教育・現JICA 愛媛県国際協力推進員）

【地球の料理教室実施】

2022年12月10日、新居浜市国際交流協会との共催で、新居浜市の一般市民の方を対象としたイベントとして「地球の料理教室」を実施しました。参加者は16名で4グループにわかれ、初めてのナイジェリア料理を一生懸命作りました。

講師はJICAの長期研修員として愛媛大学農学部博士課程で勉強しているナイジェリア出身のオガスティン・ウクボジュさんでした。参加者とオガスティンさんは英語でコミュニケーションを図りながら、みんなで楽しく料理することができました。



料理講師 オガスティン・ウクボジュさん

6 宗教：イスラム教 北部中心、キリスト教 南部中心、伝統宗教 全域

（外務省ホームページより <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nigeria/data.html>）

【いろいろな国を知ろう！】

料理が終わったあとは、オガスティンさんからナイジェリアの国や文化について紹介してもらいました。また帰国隊員の日野文香さん（平成28年度1次隊・ネパール・環境教育）にはネパールの紹介をしてもらい、アフリカやアジアの違い、それぞれの国の文化や習慣などを参加者に知ってもらうことができました。



ネパールからの帰国隊員 日野文香さん

【ナイジェリアの基本情報】

- 1 面積：923,773km²（日本の約2.5倍）
- 2 人口：2億614万人（2020年：世銀）
- 3 首都：アブジャ（Abuja）（1991年12月ラゴスより遷都）
- 4 民族：ハウサ、ヨルバ、イボ等（民族数は250以上と推定）
- 5 言語：英語（公用語）、各民族語（ハウサ語、ヨルバ語、イボ語等）



参加者全員集合

【ジョロフライスの作り方】

鶏肉とトマトの炊き込みご飯のようなお米を使った料理です。ナイジェリアをはじめ、西アフリカでも食べられています。

材料

- 米…2カップ (ロングライスが好ましい)
- 鶏のもも肉…………… 4枚
- ミックス野菜…………… 1カップ
- 小エビ…………… 1カップ
- 玉ねぎ…………… 2個
- トマトペースト…………… 1缶
- ブイヨン (西洋だし / マギーブイヨンビーフ) …… 3個分
- タイム…………… 小さじ2
- カレー粉…………… 小さじ1.5
- ジンジャーガーリックミックス (すりおろし生姜にんにくミックス) …… 小さじ2
- 油…………… 0.5カップ
- 塩…………… 少々
- コショウ…………… 少々



奮闘中のウクボジュさん



作り方

- 1) 米を洗い、炊飯器に米2カップに対して水2.5カップを入れ炊く。
- 2) 小さく刻んだ鶏肉をスパイスと小さく切った玉ねぎ(1個)でマリネする。鍋に少量の水を入れ、マリネした鶏肉を約15分茹でる。(スパイス：ブイヨン3個、タイム小さじ1、カレー粉小さじ1、ジンジャーガーリックミックス小さじ2、塩・コショウ少々)
- 3) 茹で上がった鶏肉を鍋から取り出す。茹で汁は後で使うのでとっておく。
- 4) 別のフライパンに油(0.5カップ)を入れ、火にかける。加熱し、茹でた鶏肉を入れ少し焦げ目がつくまで炒める。
- 5) フライパンに鶏肉を炒めた油を入れる。油を熱し、小さく切った玉ねぎ(1個)を加え、2分ほど炒め、トマトペーストを加える。トマトペーストが茶色になるまで炒める。
- 6) トマトペーストを炒めたところに、スパイスと鶏肉の茹で汁を加える。(スパイス：タイム小さじ1、カレー粉小さじ1/2、コショウ少々) ミックス野菜と小エビをいれ弱火で10分ほど炊く。
- 7) 炊きあがったご飯を6)に加え、均一になるようにかき混ぜる。
- 8) ご飯をお皿に盛り、鶏肉を添えたら出来上がり。

編集後記

昨年秋、30年振りにコロナ禍のなか4度目のアフリカ、タンザニア訪問をしてきた。任地、キリマンジャロ登山口の町モシ(Moshi)は、人口6-7万のタンザニアの1州都だったが、現在は20万人を越す活気溢れる地方中核都市に変貌していた。7度も登山した秀峰キリマンジャロは、哀れにも殆どの万年雪と氷河は消失しアフリカで一番高い、ただの火山になっていた。地球温暖化の影響は想像していた以上だったが、深刻なことはキリマンジャロの涵養機能の低下から、JICA援助の3期作の稲作栽培が、2期作が限度となり、水争いが起きていると聞く。生活用水も人口増加で不足し、ホテルの浴槽に入りながらキリマンジャロを遠望する事はあたり前だったが、今は不可能に近い。

自慢の野生動物が減少しているのは、温暖化による自然生態系の変化とも言われている。世界自然遺産となったキリマンジャロ登山は、大名登山のみ許可され、入山料、ガイド、ポーター、料理人などを含め25-30万円必要で、登山者が自前で食料を運び、ポーターを雇っても1万円もあれば充分であった時代は、今や夢物語である。野生動物のサファリも同様で、外貨を観光資源に依存している途上国共通の現実を痛感した。

「昔の彼女」はそこにはいなかったが、若くともエネルギーに満ち、経済を支配していた印僑なしでもやれる、自信を持ったタンザニアの快活な姿を見た。(Hal)